

コミュニティと地域性

第二文学部 社会・人間系専修3年 1D020007-3 浅田 諒

はじめに

このレポートにおいての目的は三つある。一つ目はこれまで「コミュニティ」という概念がどのように捉えられ把握されていったのか、またそれまでの経緯も考えていきたい。二つ目はコミュニティ問題と並行して、これまで成されてきた都市化に伴う人間関係研究の系譜を大まかにたどっていこうと思う。これはコミュニティ問題の筋から多少ずれることもあると思うが、地域性を考える上でそこから見えてくるものがあるので踏まえていきたい。三つ目はそれらを通して、現在の都市におけるコミュニティとは一体どのようなものなのか、そしてそれと並行して地域という空間的枠組みというものが現代においてどのような存在なのか、などという事についてこれまで考えてきたことを述べたいと思う。

第1章 コミュニティの変容

1. 漠然としたコミュニティ観

コミュニティとは果たしてどのようなものだろうか。『広辞苑』では「1、一定の地域に居住し、共属感情をもつ人々の集団、地域社会、共同体 2、アメリカの社会学者マキヴァーが設定した社会集団の類型。個人を全面的に吸収する社会集団 3、一定地域内に何らかの関係を持って生活するすべての生活个体群」となっている。私自身の漠然としたイメージでは人と人とのつながり、それも直接的で地域という空間的な範囲を超えないものである。また、何かのためにとか意図を持って積極的に作られたというよりは、自分が意識しているわけでもないのに気づいたら自然発生しているような存在として考えてしまう。つまり、ある一定の空間で、「作るというよりかは在る」、といったふるさとのような感覚なのである。

そういう意味では自分がコミュニティという場にいた感覚は、小学校から高校あたりまでであるが、大学に入って一人暮らしをはじめるとなるとはあまり感じない。隣に住んでいる人もよくわからない。町の恒例行事もなんだかわからない。仲間はあるが、自分が住む地域とは関係のないところでつながり始めたものである。そういう意味では、今たくさんの時間を共有している仲間がいる空間はコミュニティとは呼べないのかもしれない。そうであるはずなのに、頭のどこかで地域という空間の影響をさほど受けない集団を平気でコミュニティという風に捉えている。

つまり、意識してコミュニティというものを考えたときは、はじめに述べたように地域性が伴うようなものを考えるのに、そうでない時は、単に「一定の集団」くらいの意味で考えている時があるのである。しかもそれで通用してしまう。それほど広い意味を持ち、一般的に使われる言葉になったということであろう。

2. コミュニティ問題

学術的な意味として「コミュニティ」という言葉を扱った研究者の中でさえも、その概念には様々な意味が含まれ、研究者の数だけコミュニティに対する定義が存在すると述べている人もいる。そのような状況の中でヒラリー（Hillary, G. A.）は94のコミュニティ定義を収集し、分析を進めたうえでコミュニティ概念の実態に迫ろうとした。その結果大きな三つの特徴を見出したのである。その一つが、それを構成する諸個人の間で社会的相互作用がかわされているということ、二つ目が地域的空間の限定性、そして共通の絆の三つである。この三つを見る限り、自分が意識してコミュニティを考える時のものと大きな違いは感じられない。ふるさとだったり、自分が生まれ育った町のようなものだったり、自分が知らない時代の町の風景のような感じも3つの特徴に当てはまるものであろう。しかし一方で、親密な絆のネットワークという視点からコミュニティを分析・検討したウェルマン（Wellman, Barry）はコミュニティ問題に対して、ヒラリーとは違う三つのコミュニティ論が存在することを明記した。

その1つ目が「コミュニティ衰退論」である。近代における社会システムの大規模な分業の発展を経て、都市におけるコミュニティは地域的・共同的連帯が弱まったとする説である。ゲマインシャフトの衰退を警告したテンニース（Tonnies, F.）や、パーク（Park, Robert Ezra）等の「社会解体論」、ワース（Wirth, Louis）の「生活様式としてのアーバニズム」等がこの立場をとってきている。そして2つ目が「コミュニティ存続論」である。この立場は、社会システムの大規模な分業の発展が状態としてあるにもかかわらず、地域的・共同的なつながりは維持されているとするものである。ホワイト（White, Harrison）は「ストリート・コーナー・ソサエティ」で社会解体論を批判しており、ガンズ（Gans, Harbert J.）の「都市の村人たち」等も、都市において地域的なつながりを見出してきた。

この2つのコミュニティ論に対して、ウェルマンは「コミュニティ解放論」を提唱した。ウェルマンは人々のつながりは、コミュニティ衰退論のように失われてしまったのではなく、また地域的な枠組みの中だけで収まるものでもないと考えたのである。すなわちその親密な絆のネットワークは、交通手段の発達・通信手段の発達等によって、地域という空間的枠組みを超えた範囲でつながり続けている、と捉えたのである。

ウェルマンのように人々の絆としてのネットワークという視点からコミュニティを捉えた時は、自分自身がコミュニティというものを意識せずに用いているような共同体的な集団と捉えているのと似ているのである。それは、空間的制約を受けずにネットワークが分散しながら結ばれている状況なのである。自分の交友関係などを振り返ってみても、時間が経てば経つほど、ネットワークが広がり続けている。

ここで、このレポートを進めるにあたって自分も何らかの視点を元に一定のコミュニティ概念を持たなければ、この先の文章の理解が分かりづらくなってしまうので述べておきたい。私自身はウェルマンのように親密な絆のネットワークを元に、つながりを持つ人間

関係をコミュニティとすることにする。したがって、地域性という概念はコミュニティの条件として入れない。ただし、はじめに述べたように地域性の現代における機能も自分の定義したコミュニティ論とつなげながら考えていくつもりである。では一体、地域性という問題を踏まえたとえ、人々は空間的制約を受けずに人間関係を作っていると言い切れるのだろうか。

第二章 ネットワーク研究の歴史

1. インフォーマル・ネットワークの重要性

20世紀初頭、社会学者たちの中では産業化と関連した全体社会レベルで行われた都市化、官僚制化、マスメディアの発達、フォーマルで特殊目的を基盤としたネットワークを拡大させるとともに、原子化された個人による「大衆社会」を導いていくと一般的に考えられた。しかし現在の社会状況は彼らの思惑通りにはいかなかった。都市社会学者は今日までに、工業化・情報化に伴い交通やコミュニケーションが発達し空間的要因による制約がなくなりつつあるにもかかわらず、大都市においても近隣関係、友人関係といったインフォーマルな繋がりや援助といったものが顕著に残っている部分を発見した。これは都市社会学者だけではなく、産業社会学者や社会運動研究者の間にも見られるものだった。つまり、自分たちが想定した社会とは異なる社会状況が存在していたのである。

またこのような社会認識の変化は、既存の社会学概念に大きな変容をもたらした。それは、「集団パースペクティブ」から「ネットワークパースペクティブ」への転換といえるものだった。これまでの社会学研究の特徴的な点は、集団を媒介として社会を把握しようとするアプローチが一般的にとられてきた。しかし、現代の多様で複雑な状況では、このような集団や組織にまつわる社会学概念だけでとらえることができなくなり、そのような枠組みを飛び越えて取り結ばれているインフォーマルなネットワークが重要な位置を占めるようになってきている。こういう状況により、今まで重要視されなかった<ネットワーク>という概念に多くの注目があつまってきたとされる。

2. 欧米におけるネットワーク研究の歴史

ネットワークという概念には「分析対象」としての意味と「分析手段」としての意味が含まれている。分析対象としてのネットワークの研究とは社会学を社会関係の研究とみなすことであり、古くから行われてきている。一方、社会現象の分析手段としてネットワーク概念を用いたのは社会人類学の領域で、1950年代の半ばと言われている。またそこから端を発しソーシャルネットワーク分析・研究というのも70年代80年代と進み、90年代に入ってソーシャルネットワーク理論という一領域を形成するまでに発展してきている。一方で家族社会学の領域において、例えば家族のネットワークの形態上の特質を夫婦の役割のあり方と関連づけて分析しようとしたボット(Bott, Elizaeth)などがネットワークを分析手段として用い研究をしていた。また、個人がどのような人間関係を取り結

んでいるかというパーソナルネットワーク研究の実態を把握しようとする実証研究は、先ほどあげたボット等の研究の流れとは別に存在している。都市社会学においては1970年代に入ると、都市の複雑な人間関係を分析する手立てとしてネットワーク分析が用いられてくる。

その端緒としてはシカゴ社会学の都市化理論、特にワース理論 - 都市化が進むことによってコミュニティが衰退、第二次的なものとなる - の実証的再検討という観点であった。都市社会学におけるネットワーク分析の特徴は、家族社会学等とは違い個人を分析単位と設定し、その個人が結ぶあらゆるネットワークを検討の視野に入れることである。それは、家族や親戚、友人や職場仲間、近所づきあいといったところまで含まれ、それが個人のさまざまな属性（都市的な要素も含めて）によってどのような変容を見せるのかというものである。先に挙げた社会学者のウェルマンはこのように流れのもとでネットワークという視点でコミュニティ問題を捉えようとしていたのである。

このように都市社会学においてもネットワークアプローチは重要な要素として捉えられ、現在では国際ネットワーク学会の一つの研究部会を形成するまでになっている。また、そのような視点からの実証的研究も盛んに行われている。しかし、その調査研究においては問題意識やネットワーク概念の捉え方もまちまちであり、理論的方向性が明確に確立されるまでには至ってないというのも現状なのである。

個人のパーソナルネットワーク研究はフィッシャー(Fischer, Claude S.)の実証研究をはじめとして日本でもいくらか調査が行われているが、それらによるパーソナルネットワークの実態は様々な視点から分析されている。その視点からはそれぞれが独立に存在するのではなく、それぞれが関わり合いながらパーソナルネットワークに影響を及ぼしているものである。ここでは、地域性との関連を考えるべく、属性とパーソナルネットワークの関係について挙げてみたい。

3. 属性とパーソナルネットワーク

人はいくつにも及ぶ役割を実生活で行っているわけだが、その一つ一つが自分のネットワーク状況と密接に関わりあっている。

- | | |
|------|--|
| 性別 | : 女性より男性の方が職場の人・友人との付き合いが多く、親戚・近所の付き合いが少ない。男性の方がネットワーク規模（付き合い合っている人の総数）が大きい。 |
| 年齢 | : 中年層（50歳代）のネットワーク規模が最も大きい。若年層で近所との交際が少なく、老年層で職場での交流が少ない。 |
| 収入 | : 所得が高くなるほどネットワーク規模が大きく、友人・職場づきあいが多くなる。 |
| 結婚状況 | : 既婚は未婚よりネットワーク規模が大きい。また、既婚は未婚より親戚・近所づきあいが多く、職場・友人と少ない。 |

- 職業 : 農業従事者は親戚・近所の人とのつきあいがきわめて多く、友人・職場の人とのつきあいはきわめて少ない。管理職・公務員教員・販売サービスの人のネットワーク規模・職場の人・友人とのつきあいが多いのに対して、労務職・専門職・事務職それは少ない。専業主婦とパートをしている主婦とでは、専業主婦が近所の人とのつきあいが多以外は、友人・職場の人・ネットワーク規模のどれをとってもパート主婦の方がつきあいが多。無職・学生・労務職・専業主婦のネットワーク規模はきわめて低い。学生は友人とのつきあ以外、親戚・近所・職場の人とのつきあいはすべて少ない。
- ライフステージ : 子供がどのような発達段階にいるかといったライフステージによってもパーソナルネットワークの構成は大きく異なっている。第一子が就学前の人および独立した社会人の人の親戚づきあいが多。第一子が社会人の人は、すべての種類で人づきあが多くネットワーク規模も大きいのに対して、60歳以上で子供のいない人か未婚である高齢の人は、すべての人づきあが少なく、ネットワーク規模も極端に少ない。
- 出身地 : 出身地が身近であればあるほど、親戚づきあ、近所づきあが多くなりネットワーク規模も拡大する
- 居住地の住民構成 : 住民のほとんどが地付層という地域に住んでいる人は、親戚・近所づきあともにきわめて多く、ネットワーク規模も最も大きい。
- 居住年数 : 現住地居住年数・市内居住年数が長くなるほど、親戚・近所づきあが多くなり、ネットワーク規模も大きくなる。
- 居住形態 : 持家の人のネットワーク規模が最も大きい。持家の人は他の居住形態の人に比べて人づきあがすべて多。社宅・寮に居住している人の近所づきあはきわめて低い。

(大谷信介 『現代都市住民のパーソナルネットワーク』 第1章、第5章)

このように見ると、個人における属性がパーソナルネットワークに影響を与えていることがわかる。

パーソナルネットワークの実態は他にもあらゆる角度から眺めることができる。生態学的要因という視点からも重要な見解が見出せるし、都市化という状況からも見出すことができる。ただ、ここで考えたいことは地域という物理的空間が現在でも人々のネットワークに影響を及ぼすのかということである。見てもらえばわかるとおり、答えはイエスである。ただし、ネットワークの広域化という状況もあわせて存在していることがわかる。

つまり、社会状況の変化に伴い、人々のネットワークはある意味空間的な制約を受けずに広がった状態にあるといえる。ただし、その人が持つ社会的役割、属性によって空間的制約を受けざるを得ない状況も依然として存在していると考えられる。

以上のことを踏まえ、コミュニティを人々の絆のネットワークとして定義した場合、コミュニティ解放論に部分的なコミュニティ存続論が組み合わさっているのが現在のコミュニティ状況ではないかと思える。

第3章 コミュニティと地域性

1. 地域性は必要か

これまでは都市におけるコミュニティの捉え方、また地域性とパーソナルネットワークについて考えてきた。現在の都市におけるコミュニティ状況は、地域という枠を超えてネットワークが結びつく人もいれば、地域内での結びつきが強い人もいることもわかってきた。そこで最後は空間的枠組みとしての地域性を、社会学的な分析に重点をおくのではなく、現在の都市的状况においてその機能が必要なかどうか、考えてみたい。

2. 子供という視点

自分自身の生活を小さなころからたどってみても、意識せずに地域の中で生活している時期がある。それは生まれてから小学校・中学校あたりの時である。友達はほとんどが学校の友達なので自然とその行動範囲は極めて小さな空間になる。磯村英一が『コミュニティの理論と政策』の中で「コミュニティ形成の原点」と題して述べている部分がある。ここではコミュニティ形成の原点として「人間の居住本能による関係の形成は、五感と呼ばれる機能につながる。それは幼児が人間関係を発展させてゆくのに見られる。三つの本能が空間の形成の基礎となる。」と述べている。そしてその三つの本能とは「目で見る状態」「声の届く」「足の届く限り」である。そしてこの三つの本能がコミュニティを形成させていくとする。

産業革命以降の科学技術の発達から現代に至る情報化の流れに至るまで、それらがもたらしたものの一つが自分の身体の延長となるものの拡大である。マスメディアの発達は自分が居住生活を送っている空間とは別のあらゆる空間の情報を提供し、電話・インターネットの普及は簡単に空間の枠を飛び越えた人の声を繋ぎとめる。そして交通の発達は、機会があればどこにでも簡単に行くことを可能にした。私たちの身体は、自分が今いる場所とはまったく違う場所のことを隣の町のように知ることができ、そこにいる人たちと連絡を取ることができ、そこに行こうとすれば行けるのである。自分の居住空間を越えた範囲のネットワークはいくらでも作ることができる。

だがしかし、そこにはどの時代でも変わらない存在がいる。それが子供である。子供のネットワークはどの時代の人たちにとっても変わらない狭いものである。それがたとえ村社会といわれる場所であっても、現代の東京の中にいる子供でも、多少の違いはあれども空間的な行動範囲も、ネットワークの範囲においても変わらないものではないだろうか。第二章の終わりで現在の都市におけるコミュニティはコミュニティ解放論に部分的なコミュニティ存続論が組み合わされていると述べたが、その一端の理由として子供の存在が考

えられるのである。子供を持つ母親は自然とそのネットワーク形成が狭く、近所づきあいが多いのも、自分の居住空間としての意識だけが理由なのではなく、子を持つ母親としての地域に対する意識もあると思われる。

3. 治安という視点から

そのような状況を踏まえた場合、シンプルな形として見えてくるものは、大人のネットワーク範囲と子供のネットワーク範囲の明確なズレである。そして、子供に関わる大人がその影響からネットワークの変容を余儀なくされる。それは現代社会のようにネットワークの選択の自由度が増した中でも確実に見られる。

そこで地域性の大きな機能の一つが見出せる。それが地域という子供の空間の治安機能である。以前あるテレビ番組で石原都知事が凄腕の窃盗犯にどのような家に侵入するのか聞いたところその窃盗犯は、近所づきあいのなさそうな家を選ぶと言ったと言う。昨今はテレビなどでも防犯グッズ・セキュリティ等の目覚ましい発達が見られているが、やはりそれだけに頼ってはいくともカバーしきれない部分が残る。

以上のように考えた場合、地域性という空間的枠組みは子供という視点、治安という視点から一つの重要な機能を見出せるのではないだろうか。どこの都市にいる子供でもその子供たちは自分の住む町が生活の場であり、大人になるまでの成長を遂げるための空間である。その時、地域性というものの重要さが垣間見える。

終わりに

テーマが比較的大きなものにもかかわらず、内容が多岐にわたってしまい広がりすぎてしまった感もあるが、自分の中で地域性、物理的空間というものの意味、必要性を多少なりとも見出せたと思う。昔に見られるようなコミュニティ像はこれから見られるかわからないが、何らかの形として地域という枠組みによるつながりが残るといふよりは作られていくであろう。すでにそのような動きが出てきているとも思われるがまだ調べきれていない。今後はその具体的な活動等も見ていきたいと思う。

参考文献

- 倉沢 進著『コミュニティ論』2002
- 大谷 信介著『現代都市住民のパーソナルネットワーク』1995
- 蓮見 音彦・奥田 道大編『21世紀日本のネオ・コミュニティ』1993
- 高橋 勇悦・菊池 美代志編『今日の都市社会学』1995
- 高橋 勇悦著『21世紀の都市社会学』2002
- 磯村 英一著『コミュニティの理論と政策』1983
- J.バーナード著 正岡 寛司訳『コミュニティ論批判』1978
- 松本 康編『増殖するネットワーク』1995